

主 題：救われた者への神の祝福5
 聖書箇所：ローマ人への手紙 5章5節

ローマ人への手紙5章を開いてください。私たちはこれまで、患難の中でも喜びを持って生きる、その秘訣を学んで来ました。確かに、患難の中にあっても喜びを失わないでいることはどのように考えても不可能に思えます。しかし、確かに、あのテサロニケの教会の人々も、マケドニアの教会の人々も、旧約聖書ではヨセフも、そして、愛するペテロも、患難の中で喜びを持って日々生きました。どうすればそれが可能なのか、そのことを私たちはこれまで見て来ました。

☆患難の中でも喜びをもつために

1. 患難には目的がある

パウロ、そして、信仰の勇者たちが教えてくれたことは、どんな時にも患難の目的を覚えておきなさいということです。その患難はあなたにとって、あなたの信仰の成長にとって大切なものであると教えたのです。確かに、患難によって信仰は成長して行きます。その成長の過程についても私たちは見ました。患難が忍耐を生み出すこと、大変な試練、大変な苦しみ、その中でもしっかりと主を見て、主を信頼して歩んで行くなれば、その人の信仰は強められて行きます。そして、その忍耐が練られた品性を生み出すのです。そのように歩んで行くなれば、間違いなくあなたの信仰は成長し、あなたは益々主に似た者へと変えられて行きます。そして、練られた品性が希望を生み出すとパウロは言います。そのように歩んで行くなれば、あなたは益々しっかりと希望を見据えて、主にお会いする日を待望しながら、今日を生きる信仰者になって行くと、そのことをパウロは私たちに教えてくれたわけです。苦しみの中にあることは大変です。辛いです。しかし、もし私たち信仰者がその中に約束されているすばらしい神の目的を覚えるなら、私たちはその中であつても喜ぶことができるのです。そのすべてはあなたを変えるための神からのレッスンであり、あなたが成長するために神が備えてくださったものです。だから、しっかりと主を見上げて主を信頼して歩みなさいと言うのです。様々な信仰の先輩たちの証を聞いて来ました、もう一人、その人物の証を聞きましょう。ヤコブです。

様々な試練には目的があり、大切な働きがあります。ヤコブは二つの働きを上げています。ヤコブの手紙1：3-4をご覧ください。驚くべきことは、聖書の教えは一貫しているということです。聖書の中を見て行くと、そこには違う人物から同じことが繰り返し教えられています。実は、このヤコブも私たちが今まで学んで来たことと同じことを教えているのです。3-4節を見ると「**信仰がためされると忍耐が生じるということ、あなたがたは知っているからです。：4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。**」とあります。もう既にお気づきになったと思います。今私たちが見て来たこと、学んで来たことが、まさにここでも同じように記されています。ヤコブはここにどうすれば信仰が成長するのか、どのように信仰が成長して行くのか、その過程を記しています。

1) 試練によって変えられる

一つは、試練によって変えられるということです。あなたが益々聖い者に、神が喜んでくださる者に、神の栄光を現わす者に変えられて行くと言うのです。3節には「**信仰がためされると**」とあります。このことばは、ここと私たちがペテロの証を通して学んだペテロの手紙第一1：7にしか出て来ないことばです。何のことでしょう？火を通してなされる精錬のことです。金属の純度を増すために火によって精錬して行く、金属を溶かしてそこに含まれている不純物を取り除いて行くのです。私たちが何度も見て来たことです。ヤコブがここで言っている「**信仰がためされると**」というのはそのことです。金属から不純物が除かれて行くのと同じように、神はあなたのうちに潜む罪という不純物を除いて行ってくれるのです。ですから、神は試練を通してあなたを聖め、あなたを変えて行くのです。そのことをまず、ヤコブは教えるのです。

2) 試練は忍耐を生み出す

二つ目に、この患難はあなたを変えるだけでなく、あなたに忍耐を生み出すという働きを為します。ヤコブが言ったように「**信仰がためされると忍耐が生じる**」のです。「**生じる**」とは「もたらす」、「引き起こす」という意味です。特に、それがよく働くのはいろいろな困難を経験する時です。大変だけれども、主を見上げて主に信頼を置いて行こうと、そうすることによってあなたのうちに忍耐がもたらされて行くとヤコブは言うのです。ですから、様々な患難は私たち信仰者にとって非常に大切なのです。それは私たちが変えられるためであり、また私たちのうちに忍耐を生み出すためだからです。

では、この忍耐に関して彼はこのように教えています。忍耐の大切さ、それは実は、忍耐が私たちの成長を助けて行くと。「**信仰がためされると忍耐が生じるということ、あなたがたは知っているからです。:4 その忍耐を完全に働かせなさい。**」。ヤコブも私たちに言います。様々な試練を経験する時に主を信頼して行くことはなかなか難しい、でも、「**あなたがたは知っているからです。**」とあります。何を知っているか？それは、あなたの経験を通して、主を見上げて主に信頼を置いて生きることが正しいということ、そこに神の祝福があるということです。皆さんも過去の信仰生活を振り返ってみて、神を信頼することが難しかった時、それでも主を見上げて歩んだ時に、後になって、やはり神は正しい方だった、やはり神を信頼して歩むべきだった、そして、そのように歩んで来ることができてよかったと、恐らく、そのような確信をこれまでの生活を通して学んで来たはずです。ヤコブは言います。私たち信仰者は主に信頼を置いて歩むことがどんなに素晴らしいことであるかということを知っていると。だから、彼はこのように言ったのです。4節「**その忍耐を完全に働かせなさい**」。すなわち、そのことをあなたは知っているのだから、「なぜ？」とか「神さま、おかしいですよ」とか「納得できません」というような不信仰を捨てて、主を信頼して従い続けて行きなさいと、ヤコブはそのように勧めるのです。試練はあなたのためであるから、主をしっかりと信頼して、忍耐を持って歩み続けて行きなさい、その問題から逃げてはいけない、しっかりと主を信じて立ち向かって行きなさい、その時にあなたのうちに忍耐が成長して行く、そして、あなたの信仰は変えられて行くと言うのです。そして最後に、ヤコブは言います。そのようにあなたが歩んで行くなら、確実にあなたの信仰は成長しあなたは変えられると。4節の後半にそのことが記されています。「**そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。**」と、「**成長を遂げた**」者とは「おとな」ということです。信仰的に靈的におとなとなって行くということです。同時に「**何一つ欠けたところのない、…完全な者となります。**」、神の前にふさわしい者になって行くということです。

この二つのことを見た時、どちらも受身です。つまり、ヤコブが言っているのは、あなたの信仰を成長させてくれるのも、あなたが神の前にふさわしい者になって行く、その働きをしてくれるのも、実は神だと言っているのです。神が確かにあなたの信仰を成長させてくれると言うのです。しかし、確かに神の働きであっても、私たちには何の責任もないのでしょうか？そうは言っていません。もう一度ヤコブの手紙を見てください。3-4節では今見て来たように、このように生きて行きなさいという教えがあります。そして、神の働きがなされるのはその後です。4節に「**そうすれば**」とありました。ですから、様々な多くの患難があっても、その中でしっかりと主を見上げて主を信頼して歩んで行くなら、「**そうすれば**」、神はあなたを変えると言うのです。

ですから、私たち信仰者が覚えておかなければいけないことは、神は神が全部してくれるのだから私は何もしませんという、無責任な信仰者になりなさいと教えようとしているのではないということです。却って、私たちに大きな責任があるのです。それは、どのような患難の中にあっても主を見上げて、主を信頼して、主に従い続けて行くという、その責任です。そのようにあなたが歩んで行くなら、神があなたのうちにわざを為すと言っているのです。ですから、信仰の成長は、あなたが困難に正しく対応することの結果なのです。困難に正しく対応することがあなたの信仰の成長に必要なのです。あなたが完全な者となること、神の前に喜ばれ受け入れられる者となって行くためには、あなたが日々経験する様々な困難、様々な患難、様々な悲しみ、様々な痛み、そのようなあらゆることに対して正しく対応して行く、その責任をあなたが果たすなら、結果として、神はあなたの信仰を成長させて行ってくれると言うのです。ですから、私たちににとって必要なことは、起こってくる様々な問題に正しく対処することです。このヤコブ1:2には「**私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。**」とあります。つまり、ヤコブが言っていることは、そのように考えなさい、そのように見なさいと、これは命令です。ヤコブは一人ひとりの意志に働きかけるのです。あなたは様々な試練に遭遇した時にそのように自らに命じなさい、私はこの中であって正しく歩んで行く、私はこの中であって神を信頼して歩んで行くと、自らに呼びかけなさいと言っているのです。

ですから皆さん、私たちがどのような患難の中でも喜びを持てるそのカギは、もう繰り返し見て来ましたが、どんな時にも神が与えてくださっているその患難の中にあるあなたのための素晴らしい目的を覚えて、主を見上げて主に従い続けて行くことです。そのことをヤコブも私たちに教えてくれるのです。

2. 神の愛を覚える

患難の中にあっても喜びを持って今日を生きるために、患難の目的を覚えること、そして、パウロが二つ目に教えることは「**神の愛を覚えなさい**」ということです。ローマ書5章に戻ってください。

1) 神がくださる希望は失望に終わることがない

神は私たちキリストの恵みによって救われた者たちを、その罪の滅びより救い永遠のいのちを与えてくださった。そして、私たちに主にお会いする永遠の希望を与えてくださった。だから、ローマ5:5

には「この希望は失望に終わることがありません。」とあります。神の恵みによって救われた私たちに神がくださったこの希望は失望に終わることがないのです。この「失望」ということばは新約聖書の中に13回出て来ますが、「辱める、侮辱する」ということばです。パウロがここで言いたいことは、信仰者、救われた一人ひとりが神に対してこのような希望を持って歩み続けて行くこと、それは決して神の前で恥入ることにはならないということです。旧約聖書の中にも詩篇22:5に「彼らはあなたに叫び、彼らは助け出されました。彼らはあなたに信頼し、彼らは恥を見ませんでした。」と記されています。人々が神の前に助けを求めた時に神は彼らを助けられた、彼らは神を信頼し、そして彼らは恥を見なかったと言います。もう一箇所、詩篇25:3にもこのように記されています。「まことに、あなたを待ち望む者はだれも恥を見ません。ゆえもなく裏切る者は恥を見ます。」と。つまり、このローマ書5:5の最初にパウロが言っていること「希望は失望に終わることがありません」、それは、神に希望を置いている人たち、クリスチャンは確かにこの地上にあって人々から馬鹿にされ嘲笑されても、主から辱められること、また主の前に立つ時に恥ずかしい目に遭うことはないということです。主に信頼して生きた者が「私は間違っていた」と思う時はないと言うのです。失望することは絶対ない、この希望がただの希望で終わることはないと言うのです。必ずこの希望は実現するのです。私たちは間違いなく主イエス・キリストのもとに上がるのです。主イエス・キリストとともに永遠を過ごすのです。この希望はただの希望ではないのです。ですから、私たちは恥を見ないということです。私たちにとって大切なことは、パウロが教えてくれるように、しっかりと希望を持って生きることです。この希望がただの望み、ただの願いで終わらない証拠をパウロはこのように挙げています。

2) 決して失望することのない希望である証拠

5:5b「なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」

(1) 聖霊なる神が私たちのうちに与えられていることとその聖霊なる神の働き

パウロは救われた私たちに与えられた神の希望がただの希望で終わらない根拠として、聖霊なる神が私たちのうちに与えられているということ、また、その聖霊なる神の働きであると言いました。5節に「私たちに与えられた聖霊によって」とあります。イエス・キリストを信じるひとり一人には聖霊なる神が与えられています。そして、その聖霊なる神が私たち信仰者のうちにどのような働きを為すのか、パウロは言います。「聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」と。この「注がれている」というのは「豊かに与える」という意味です。辞典を見る「霊的に元気を回復させるもの、励ますものが、ちょうど水を注ぐように注がれること」とあります。そのことをパウロは教えたかったのです。つまり、聖霊なる神が私たちクリスチャンのうちに何を為してくれるのか、私たちの心の中に励ましをもたらし、私たちの心の中に霊的な元気を与え続けてくれると言うのです。

聖霊なる神が私たちに明らかにしてくれることは「神の愛」です。いろいろな困難に遭遇した時、辛かった時を思い出してみてください。ある人たちはその中にあってあることを疑います。「神の愛」です。大変な問題に遭遇したとき、神は本当に私のことを愛してくれているのかな、私のことなど忘れてしまったのではないかと思います。このようにサタンは見事に私たちが神の愛を疑うように働きかけます。あなたは愛されていない、神はあなたよりもあの人の方を余計に愛しているなどと…。でも、パウロが教えていることは、私たちに与えられた聖霊なる神は、信者ひとり一人のうちに、ちょうど水を注ぐように元気を与えてくれる、心配しなくていい、あなたは愛されているということです。しかし、そのことをしっかりと覚えるためには、私たちはどのように愛されているのか、どんなに大きな犠牲をもって愛されているのかということをしっかり覚えなければいけません。ですから、パウロはこの6節から11節まで、その神の愛についてもっと具体的に私たちに教えるのです。神の愛がどんなに犠牲を伴ったものであり、また、神がどんなに大きなみわざを為してくれたのか、この5節から8節まで、そして、9節から11節にそのことを教えています。そのことは私たちは次回から学んで行きます。

ですから、パウロが言っていることは、イエス・キリストを信じた者たちは、この聖霊なる神によって日々神の愛に圧倒され続けているということです。私たちがしっかり神を覚えるなら、その愛を覚えるなら、私たちの心は「このような者を愛してくださって本当に神さま感謝します」と、その愛に満たされ続けて行くと言うのです。なぜなら、神は私のような罪人を愛して、私の罪のために自ら十字架でいのちを捨ててくださったからです。私の過去、私の現在、そして、私の未来の罪を知った上でなお愛してくださったのです。このように罪深い者を愛して、ここまで大きな犠牲を払ってくださった主の愛は変わることがありません。ということは、あなたも私も決して見捨てられることはないのです。私たちクリスチャンがこの神の愛をしっかりと覚える時に、私を愛してくださっている主は、私のために確かに最善のことを行ない続けておられる、主のおことばを信頼することができるようになって行くのです。

(2) 真実なお方

ローマ人の手紙8:32でパウロはこのように言っています。「私たちすべてのために、ご自分の御子を

さえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。」と。私たちの神は絶対に約束を破ることのできない真実なお方です。約束は必ず守られる方です。約束を破ることは神にはできないことです。言われたことを撤回することは神にはできないことです。神が間違いを犯すということはないのです。それは神のご性質に反するからです。もし、神がそのようなことをなさるのであれば、それは神が神でなくなったことを意味します。

私たちが日々訪れる様々な患難の中で、喜びを持って、感謝を持って歩んで行くことができるためには、私たちはしっかりと患難の目的を覚えなければいけないし、また同時に、私を愛してくださっているその神の愛をしっかりと覚えることが必要です。つまり、言い方を変えるなら、私の神がどういう方なのかを私たちが知れば知るほど、その方に対する確信が増して行くということです。神が私を本当に愛してくださっていると分かった人たちは、神の愛を疑いません。なぜなら、いつも十字架を見上げるからです。これだけの犠牲をもって私を愛し、こんな罪深い私をこれほどまでに愛し続けてくださっている、だから、その方の愛を疑わないのです。この方が常に真実な方である、ゆえに、この方の約束を疑わないのです。

◎ヘブル人への著者の証

信仰者はみなそのことを学んでいるのです。信仰者はみな神がどのようなお方かを学ぶことによって、それぞれが確信を強めているのです。ヘブル人への手紙の6：10－18を見てください。この書の著者は「私の神はこのような神だ」と二つのことを教えています。私の神は正しいお方であり、私の神は真実なお方であると。「10 神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。11 そこで、私たちは、あなたがたひとりひとりが、同じ熱心さを示して、最後まで、私たちの希望について十分な確信を持ち続けてくれるように切望します。12 それは、あなたがたがなまけずに、信仰と忍耐によって約束のものを相続するあの人たちに、ならう者となるためです。13 神は、アブラハムに約束されるとき、ご自分よりすぐれたものをさして誓うことがありえないため、ご自分をさして誓い、14 こう言われました。「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたを大いにふやす。」15 こうして、アブラハムは、忍耐の末に、約束のものを得ました。16 確かに、人間は自分よりすぐれた者をさして誓います。そして、確証のための誓いというものは、人間のすべての反論をやめさせます。17 そこで、神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはっきり示そうと思い、誓いをもって保証されたのです。18 それは、変えることのできない二つの事がらによって、——神は、これらの事がらのゆえに、偽ることができません。——前に置かれている望みを捕えるためにのがれて来た私たちが、力強い励ましを受けるためです。」

今言ったように、この著者は二つのことを私たちに教えています。神というのは正しいお方であり、うそ偽りのないお方である。神の言われたことは常に正しいと10節にありました。また同時に、神は真実な方、つまり、神はいつまでも変わることはない完全な方だと。そのことを「誓い」をもって説明されています。私たち人間もよく「〇〇に誓って間違いありません」というようなことを言ったり、また、聞いたりします。最近はその聞くことが多いです。でも、私たちはそれを聞いてもどうも信じられません。なぜ、人間は誓いをもって話すのでしょうか？それは自分の言ったことを信じてもらいたいからです。16節に「**確証のための誓い**」と書いてあります。なぜ、私たちは誓わなければいけないのか、それは自分の言っていることを聞き手が疑って信じないからです。なぜなら、私たちは「人間はみんな不完全だ」と知っているからです。でも、神は違うのです。神の言われることにはうそ偽りがありません。神はすべてのことにおいて真実なお方です。では、その真実なお方がなぜ人間と同じように誓いをもって話されたのでしょうか？それは神の約束にはうそ偽りがありませんことを私たち人間に分からせるためです。この神は信じるに値するお方であるということ私たちに人間に教えるためです。

もう一度16節をご覧ください。人間は自分の言ったことが確かなものであると人々に信じさせるために、自分より優れたものを指して誓うと言います。誓いをした時は確かに、一時的にすべての人々の反論をやめさせることが可能だと言います。しかし、神の場合はどうでしょう。13節をご覧ください。

「**神は、アブラハムに約束されるとき、ご自分よりすぐれたものをさして誓うことがありえないため、**」、神以上に偉大な方はいない、だから、神は「**ご自分をさして誓った**」というのです。その目的は17節「**そこで、神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはっきり示そうと思った**」、そのことです。神は私たちに神の言われることにあやまちがあること、そういうことを認めたと言っているのではないのです。神は私たち人間が、神の言われることには絶対間違いがないということをしつかりと学ぶために、ご自身のご計画に変わりがないことを、私たちがしっかりと信じるために、人がするように、敢えて誓いをもってお話になった、「**誓いをもって保証されたのです。**」。そして、神はその誓われたことをそのとおりになさったのです。アブラハムは神を信じました。そして、神は彼に約束したことをそのとおりに成し遂げられた。だから信仰者の皆さん、あなたは神の約束を疑ってはならないのです。神がこのみことばで約束してくださった、その約束を疑ってはならないのです。神のおことばを疑う者になってはなりま

せん。この著者は18節に「それは、変えることのできない二つの事がらによって」と言いました。何のことでしょう？「二つの事がら」というのは「約束」であり「誓い」です。つまり、著者が言いたかったことは、神は神の約束を絶対に変えることができない、約束されたことは必ず実行なさるということです。神があなたを救うと言われたならあなたは絶対救われるのです。神があなたに永遠のいのちを与えられたからあなたは永遠のいのちをいただいたのです。神はあなたに死んでも生きると言われたから、あなたは死んでも生きるのです。神の約束には間違いがないのです。神は約束を変えることをなさるような方ではないと言うのです。二つ目は、誓いです。神が誓われたことは必ずそうなる、神は誓いを変えないというのです。これが私の神だと言うのです。これが私たち信仰者の神だと言うのです。だから、この著者は11節と12節でこのような二つの注意を与えています。一つ目に、その希望を奪い取られるようなことがあってはならないと言います。11節「そこで、私たちは、あなたがたひとりひとりが、同じ熱心さを示して、最後まで、私たちの希望について十分な確信を持ち続けてくれるように切望します。」と、希望を失ってはいけないと言うのです。二つ目に、12節「それは、あなたがたがなまけずに、信仰と忍耐によって約束のものを相続するあの人たちに、ならう者となるためです。」と、信仰者よ、どんな時にも主をしっかりと信頼して、その主のみこころがなされることを忍耐をもって待ちなさいと、そのように教えているのです。

◎詩篇の著者の証

また、詩篇の著者も次のような証をしています。詩篇119：65－72です。「：65 主よ。あなたは、みことばのとおり、あなたのしもべに良くしてくださいました。：66 よい分別と知識を私に教えてください。私はあなたの仰せを信じていますから。：67 苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたのことばを守ります。：68 あなたはいつくしみ深くあられ、いつくしみを施されます。どうか、あなたのおきてを私に教えてください。：69 高ぶる者どもは、私を偽りで塗り固めましたが、私は心を尽くして、あなたの戒めを守ります。：70 彼らの心は脂肪のように鈍感です。しかし、私は、あなたのみおしえを喜んでいます。：71 苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。：72 あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。」

67節に「苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたのことばを守ります。」とあります。この65節から72節、この詩篇の著者は「主なる神の真実さ」を教えています。神は信頼に値する方、神は絶対うそをつかない方、神の言われたことは必ずそのようになると、そのことを教えているのです。65節を見ると「主よ。あなたは、みことばのとおり、あなたのしもべに良くしてくださいました。」とあります。神は言われたその約束を必ず守られると言っています。忠実に歩む時に必ず主は祝福を与えてくれる、そのことを彼が学んだことを告白しているのです。あなたはみことばのとおりあなたのしもべによくしてくださいました、あなたに従って来たこんな私に良くしてくださいました、あなたが約束されたとおりですと。そして、68節では「あなたはいつくしみ深くあられ、いつくしみを施されます。どうか、あなたのおきてを私に教えてください。」と「あなたのおきてを教えてください」と再びここで祈っています。なぜなら、この著者はかつて神に対して罪を犯したのです。67節にそのことが記されています。「苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。」と。この「あやまちを犯す」とは、道徳的にまた、宗教的にあやまち、罪を犯すという意味です。このことばは英語の「エラー」の語源になっているのです。つまり、ここでこの詩篇の著者は「私は自分の意志でもって神の前に罪を犯した」と言っているのです。その罪について私たちは見ることができます。66節「よい分別と知識を私に教えてください。私はあなたの仰せを信じていますから。」と、「信じている」とは信頼しているということです。今、信頼している、でも、かつてそのみことばに信頼していなかった時があるということです。67節「しかし今は、あなたのことばを守ります。」、それは守っていなかった時があるということです。69節に「高ぶる者どもは、私を偽りで塗り固めましたが、私は心を尽くして、あなたの戒めを守ります。」、心を尽くして神の戒め教えを守っていなかった時があったと言っているのです。70節「彼らの心は脂肪のように鈍感です。しかし、私は、あなたのみおしえを喜んでいます。」、ここでも喜んでいなかった時があったと言っているのです。この「心は脂肪のように鈍感」だった、非常に高慢で神の前に学ぼうとも、神の教えを聞こうともしていなかったというのです。神の教えなんか必要ない、自分の知恵で、自分の力で、私はそのように生きていた時があった、そのように私は自分の意志で神の前に罪を犯していたと言っているのです。そして、その時にいろいろな苦しみを経験したと言うのです。この著者は、そのようなことを通して私は大切なことを学んだと言うのです。何を学んだのか、主のみことばを守り行なうことです。主の教えに従い続けることの大切さです。ですから、66節「よい分別と知識を私に教えてください。」と言うのです。「分別」、何が正しくて何が間違っているのかをしっかりとわきまえることができる、判断することができる力です。神の前に何が正しいのか、何がそうでないのかを見きわめる力をくださいというのです。

また、もう一つ「知識」、65節から見て行くと、ここでこの著者は、どれだけのことを頭に知識とし

て蓄えるかということを書いていないことは明らかです。彼が言っていることは、どのように生きるかということです。かつてはこのように神の前に逆らって生きていた、でも、これから私はこのように生きて行きたいと、生き方について話をしているのです。ですから、彼が望んだことは、神の知識をもっと得ることによって、神のみことばを通して神のみこころをもっと知ることによって、私は正しく生きて行きたいということです。彼は「神さま、私は毎日の生活において、あなたの前に喜ばれることが何かをしっかりと判断できるように分別を教えてください。しかも私は、あなたのみことばを通して学んだことを、毎日の生活で生かして行きたい。そのような知識を私にください。」と言っているのです。この人物は罪を通してあることを学んだのです。神のおことばに従うこと、どんな時でも神の教えに従って行くことが大切である、それが最善だということです。だから、私はこれからもこのように歩んで行きたいから、「**分別と知識**」を教えてくださいと祈っているのです。

この119：71には前にも見ましたが「**苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました**」とあります。苦しみも実は神からのすばらしい贈り物だった、すべては神の摂理のうちにある、この苦しみも実は神からのすばらしいご好意であると言います。だから、彼は様々な苦しみに会うことを避けて通ろうとはしなかったのです。なぜなら、苦しみを通して私は益々神の教えをより学ぼうと、そのような思いに駆り立てられて行く、だから、苦しみを通して学ぶことがたくさんあるから、私はそのことを喜びとする、だから、「**苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。**」と言っているのです。

皆さん、神は何の計画もなくあなたを苦しみに合わせるようなことはなさいません。神は何の目的もなく、ただあなたを苦しませる、あなたに患難を与える、そのようなことはなさいません。そこにはすばらしい神のご計画があるのです。神はあなたを愛して、あなたのために喜んでひとり子のいのちを犠牲としてくださった、そんな方です。あなたを愛してくださっている方です。その方はあなたの信仰が成長することを望んでおられます。そして、あなたの信仰が成長するために、神は敢えてあなたに必要な試練、患難を与え続けてくださるのです。

なぜ、苦しみを喜べるのか、それを通して私たちは大切なことを学ぶからです。それを通して私たちは信仰が成長するからです。私たちの神がどんなにすばらしい偉大な方であるかを学んで行くからです。その方に対して信頼を増し加えて行くからです。その方に対する確信を増して行くからです。信仰者の皆さん、主を見上げなさい。あなたの主をしっかりと見上げなさい。どんなにこの方が信頼に値するお方であるかということを知り、自分の心を諭しなさい。この著者が言ったように「**苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました**」と言うのです。どんな神があなたの神であるのかを覚えなさい。あなたを愛している神です。あなたを救ってくれた神です。あなたを用いようとしてくださっている神です。私たちには大きな責任があります。信仰の成長は神が与えてくれるものです。でも、この方をしっかりと信頼して、このみことばに従い続けて行くかどうかは私たちの責任です。ですから、クリスチャンの皆さん、しっかりとあなたの主を見上げることです。

詩篇46：10「**やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。**」、全能の神である、私たちの神をしっかりと見上げて、その方にしっかりと信頼を置いて歩み続けてください。それが主が私たちに望んでおられることです。